季刊　ベストドクターズ®インジャパン　Issue 27　2014

# Best Doctors®

今月のベストドクター
地方独立行政法人　大阪府立病院機構
大阪府立母子保健総合医療センター
診療局長兼整形外科主任部長
川端 秀彦 先生

# 子どもの自立を手助けする整形外科治療を目指して

手足の長さの違い、指の数や形状の異常など、四肢先天異常を中心に、子どもの整形外科を追求してきた川端秀彦先生。家族との信頼関係を築きながら、自らは技術を磨き、子どもの未来を左右する治療の決断を支える。あくまでも、子どもの自立を手助けする医療の実践を目指す川端先生に、小児整形外科の今を伺った。

地方独立行政法人　大阪府立病院機構
大阪府立母子保健総合医療センター
診療局長兼整形外科主任部長
**川端 秀彦** かわばた・ひでひこ

1980年大阪大学医学部卒業。86年同大医学部大学院博士課程修了。88年オーストラリア留学（Microsurgery Research Centre, St. Vincent's Hospital, Melbourne）。91年より大阪府立母子保健総合医療センター整形外科に勤務。96年同センター整形外科主任部長、2014年より現職。手の外科、小児の整形外科、とくに四肢先天異常に対する骨延長・変形矯正の手術には定評がある。先天性四肢障害児父母の会コンサルタント医師を務めるなど、子どもたちの自立を支える医療を実践。

## 子どもたちの医療の場、生活の場としてのセンター

大阪府立母子保健総合医療センターは、1981年に地域の医療機関では対応が困難な妊産婦や低出生体重児、新生児に対し、高度・専門医療を行うことを目的として開設された。その後、1991年には、小児医療部門（子ども病院）が設けられ、各診療科の専門医が、乳幼児期の子どもたちに対して新生児期から一貫した医療を提供している。安心して産み、健やかに育つことを願い、家族はセンターを訪れる。

大阪府和泉市。最寄駅構内からほぼ一続きといってよい歩道を抜けると、センターの建物が見える。門を入ると一面の芝生。「母と子のにわ」だ。子どもたちが散歩したり、天気のよい昼には、お弁当を広げる親子の姿も見られるという。

「母と子のにわ」の一角にたつ石のモニュメントには“ラテンアメリカの母”と呼ばれたチリの詩人、ガブリエラー・ミストラル女史の詩が刻まれていた。

我々が必要とするものは多い
が、それはさきにのばせる
しかし、子どもは待てない

今、この瞬間も
子どもの骨格は形づくられ
その血肉は作られ
その知能は発達しつづける
子どもにとって“明日”はない
“今日”しかないのだ

「モニュメントの柔らかい曲線は、女性・母を象徴しているとのことです」と川端先生。取材スタッフと一緒に歩きながら、センターを案内してくれた。

センターには、子どもたちのためにさまざまな工夫をこらした設備がある。例えば、放射線治療室に続く廊下は、照明を消すと広大な宇宙を思わせるデコレーションが浮かび上がる。CT機器は、特注のシールで大きな猫そのもの、その部屋の壁から天井一面には動物の絵が施されている。「猫や〜」「私の洋服も光ってる〜」とはしゃぐ子どもたちの声が聞こえてきそうだ。ここは、子どもたちの医療の場であり、生活の場でもあるのだ。

91年の子ども病院の開設以来、川端先生は、子どもの「手の外科」をはじめ、主に先天性股関節脱臼を診てきた。「僕が医学生の頃は、先天性股関節脱臼、先天性内反足、筋性斜頸は小児整形外科の三大疾患として習いました。でも今、これらの疾患は、市中の病院ではほとんど診ることがなくなっている」と語る川端先生。日本整形外科学会の会員を対象に調査した結果によると、1975年当時、整形外科医1人当たりが診ていた子どもの数は310人。以来減り続け、2010年は47人になっている。会員は増加し続け、出生数が減少し続けているのだから、当然の現象といえるだろう。

病棟の回診風景。夏休みを利用して遠方から治療を受けに来た子どもと母親に対して、骨延長の創外固定器に関する注意点を説明。医師、子ども、親が連携して、子どもの未来を紡いでいく。

（左上）放射線治療室のＣＴ機器の前で、放射線技師の鎌田真奈先生と。
（左下）カンファレンス風景。経過を報告する医師に川端先生から「ギプスを嫌がってない？」「だいぶお姉さん（の年齢）だから、つらいかもしれないね」「明日退院？」など、それぞれの子どもたちの心に寄り添ったきめ細かな質問が飛ぶ。こうした視点が整形外科のスタッフ全員の共通認識となっていく。

（左）「よろしくお願いします」の医師全員の掛け声とともに手術が始まった。川端先生を中心に、手術スタッフ全員が息を合わせる。
（右）執刀風景。サージカルルーペで患部を凝視しながら、1週間に3日、ほぼ丸1日、手術場に立ち続ける川端先生。２～3時間かかる手術を1日に3～4件行ってきた。

「ところが、子ども病院では手術数も外来者数も右肩上がりで、年々増え続けています」

家庭あたりの子どもの数が減っている分、親の関心は集中する。手厚いケア、少しでもよい医療を受けさせたいとの親心が「昔は経過をみながら終わっていたささいなけがや異常でも、専門の病院を受診するようになっているのではないか」と川端先生は分析する。「その分、一般の整形外科医が子どもを診る機会、トレーニングの機会を逸しているとしたら、それは問題」と医療の格差が広がる可能性に懸念を見せる。「患者さんの側にすでに専門医志向傾向がみられるのですが、やはり入口は一般の先生に診てもらい、難しい病気とそうでない病気を振り分けてもらうのが理想的」。それが医療機関の役割、機能を有効に生かすことになる。

## ロシアの偉才が残した骨延長の技術

小児病院であっても年間1例程度しか診ることのない疾患が、母子センターには10数例集まるという。それほど川端先生率いる整形外科チームの実力は高く評価され、全国から治療を求めて子どもたちが来院する。勢い、経験が蓄積され、さらに治療成績は向上していく。「経験を積めば積むほど、ああしてみたら、こうしてみたらと、アイディアが出てきます」。特に四肢先天異常の手術件数は約3,000例、分娩麻痺は約400例を数えている。

重度の手指の欠損、下肢の低形成、変形。組織の再建、骨延長や変形を矯正する手術などを施さなくては、

物をつまめない、うまく持てない、立ったり歩いたりできない。子どもたちの自立を保つ生命線ともいえる機能を回復するのが治療の目的となる。

川端先生の今の実績を支えるのが、ミリ単位の血管や神経をつなぐマイクロサージャリーの技術と創外固定器を用いた骨延長術だ。

現在行われている骨延長術は、ロシアのクルガンという町の整形外科医イリザロフが1950年代に独自に開発した技術だという。イリザロフは、条件が整えば骨や軟部組織は牽引に対し組織新生が起こるという原理（stimulating effect of tension stress on regeneration）を発見した。逆転の発想、用いる器具もオリジナル。あまりに独創的な技術は、当時「ペテン」と評されたこともあったとか。しかし、結果が彼の正しさを証明した。ほかの医師が匙を投げるような骨折がイリザロフによって次々に治っていった。東西冷戦のさなか、西側に伝わることのなかった彼の技術は、やがて、80年代のペレストロイカ、グラスノスチ、ベルリンの壁崩壊という大きな歴史の流れとともに、世界に広まることになった。一遍の叙事詩のような逸話を一気に語る川端先生。当のイリザロフとは、90年に日本の学会で顔を合わせたという。「写真を撮っておけばよかったかな」と感慨深げに振り返る。92年、イリザロフはこの世を去った。技術は今につながり、それによって、救われる子どもたちがいる。

## 自分の足で歩けるように<br>自分の手で食べられるように

川端先生たちが向き合う子どもたちの多くは、手足の長さや指の本数、形状、いろいろな面でほかの多数の子どもたちとは違っている。そのことによって生活に不具合や不都合が出ないように手助けするのが、医療者の役目だ。負担や効果を考慮し、治療や手術の時期を見極めるが、最も大事なことは、両親の理解と納得、そして信頼関係の構築だという。川端先生の元を訪れるのは新生児から6歳の子どもが多い。本人に代わって親が治療を選択、決断を下すことがほとんどだ。

（上）マイクロサージャリー手術風景。顕微鏡をのぞきながら、子どもの微細な血管や神経を一針一針縫合。「直径1ミリの血管に8針糸を掛けて管腔構造を残します」と語る。子どもの自立を支える手足の機能を丁寧に再建していく。
（下）スタッフと共に手術室で画像を見つめる川端先生。

（左）朝、ナースステーションでの打ち合わせ風景。画像を見つめながら1人1人の状況を確認していく。
（右）「母と子のにわ」にたつ石のモニュメント。

その選択や決断が本当に子どものためになるのか。果たして将来、子どもはそれを認めてくれるのか。親は、当然悩む。

「思春期には、何もなくたってささいなことで悩んだりする。まして、人と違っているところがあればつらい思いもします」。その時、子ども本人が踏ん張れるかどうかは、実は、「治療を決断した時の『親の心意気』にかかっている」

治療が成功しても、大なり小なりほかの子どもとの違いは残る。しかし、最善と思う方法を選び、その子らしさを尊重できれば、違いを隠す必要はない。「でも、隠してしまう親御さんもいるんです」と川端先生。わが子が不憫と思い、手術を施した手に手袋をさせる親。その子は、やはり自分もその手を人の目から隠すようになるという。「逆に、ふつうに公園デビューして、周囲と一緒に遊ばせる環境だと、気にしなくなりますね」

親の理解と納得は「結局は、われわれと家族との信頼関係」に帰する。「例えば、歩けるようになったとしても、歩き方は普通と違う。どうしても100点満点にはいかない治療。それでも、どれだけ満足してもらえるか」。メンタルの治療やケアは、要は、誠意をもった人間同士の話し合いに尽きるのかもしれない。しかし、それは専門家としての知識や技術への努力と自信に裏打ちされてこそだろう。

川端先生が親、家族との関係をより強く意識するようになったのは、このセンターで子どもたちを診るようになってからだ。大学では、末梢神経をテーマに研究を進め、分娩麻痺を中心にマイクロサージャリーの技術を磨いていた。91年にセンターに誘われたのも、「手の外科」での実績が認められたから。しかし、実際に働き始めると、専門分化が進んでいる大学と違って「手だけを診ているわけにはいかない」ことに気づく。「いろいろな病気のいろいろな子どもがやってくる。どこどこが悪いからと部位ごとに体を分断することはできない。まず人ありき。そのうえで、どんな治療ができるかを構築していかなければいけない」と思い始めた。子どもを中心に置けば、自然に親との人間関係も培われていく。

## 技術×ヒューマニティー＝名医

高校時代のある日、ふと「自分が社会のためにしてきたこと（＋）」と、「してもらったこと（－）」を天秤にかけてみたという川端先生。「どうもマイナスが

多い」と感じた川端先生は、社会への借りを返す「世のため人のためになる仕事」として医者になることを決めた。「根が単純なんです」

その川端先生が名医を割り出す“計算法”を考案してくれた。「病気を上手に治す技術、新しい治療法に精通していることは、否定できない当然の条件」。かつ「患者さんに寄り添い、思いやりをもってあたる人間味・ヒューマニティーもまた誰もが求める条件であるはず」。そこで「これを足し算して和を求めるのではなく、掛け算をするんです」。掛け算だと、一方がとても高い値であっても一方がゼロなら答えはゼロ。「どちらかだけ突出していても名医、良医とは言えないということです」と笑う。ご本人の名医度を伺うと「僕は天才的だとか神業といえるほどの技術はないけれど、下手でもない。子どもたちや家族とのかかわりは心掛けています。掛け算だとそこそこバランスが取れているのではないかな」

後進には、「何事も無駄だと思わず手を抜かず、楽しんでやれ」と声をかける。「誰にでもつらい時期はある。でもどんな環境にあっても、自分のやりたいことを思い続けていれば、こういうことだったのかと、将来につながっていたことに気付く時が来るものです」

座右の銘は「夢を見て　考え　試みて　祈れ」。大阪大学医学部長、総長を務めた山村雄一先生の言葉だという。研究者そして臨床家としての究極の姿勢と、川端先生の心には響いた。

川端先生たちと子どもたちとの付き合いは長くなる。生まれた時以来という付き合いも少なくない。難治性、手術の組み立てとしての必要性、成長による変形や再発といった要因によって、くり返し手術を行わなければならない子もいる。進学や就職など大きな節目はもちろん、生活の変わり目などに病気や治療の影響によってぶつかる壁もある。川端先生が大学を卒業してすぐに診た子とは30年来の付き合いだ。ほかの施設では両足を切断するしかないと言われた子が、10回近い手術についてきてくれたこともあった。

一般向けの講演などで、よく川端先生はこんな言葉で話を終えるという。

自分自身の足で歩くことができるように
自分自身の手で日常生活が送れるように
いつか自立する子どもたちの、未来のための手助けをする医療を目指している……。

（上）キッズセミナーでの指導風景。参加した子どもたち全員が手術衣に着替え、講師の川端先生指導の下、手術室に入り、骨折治療の外科手術を疑似体験した。
（下）整形外科のスタッフと一緒に。後方の壁一面に泳いでいるのは、子どもたちが描いた海の生物の絵だ。スタッフ一同、ここへ集まる子どもたち1人1人に寄り添う医療を日夜追求している。

# お知らせ

## Best Doctors in Japan™ 2014-2015 の皆様へ

本誌読者の先生方におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

今号（27号）は、昨年度のピアレビュー調査に基づき、あらためて「Best Doctors in Japan 2014-2015」にご選出された先生方にお届けする1号目となります。小誌を初めてお受け取りになられた諸先生方におかれましては、ご選出のお祝いとともに、ベストドクターズ社についてご案内申し上げますので、ご一読いただけると幸いです。

### ● ベストドクターズ社とは？

ベストドクターズ社（本社：米国マサチューセッツ州ボストン、http://www.bestdoctors.com/［日本語WEBサイトhttp://www.bestdoctors.jp/］）はハーバード大学医学部の教授2名により、「病に苦しむ方々が最良の医療を享受できるように」との理念の下、1989年に創業いたしました。

弊社は現在、本社のある北米をはじめ、中南米、ヨーロッパ、オセアニア各国で事業を展開。日本には2002年に進出し、重篤な疾患で苦しむ方々への「ベストな医師＝Best Doctors in Japan」のご照会を柱に活動しています。保険やクレジットカード等の付帯や企業の福利厚生サービスとして、また、健康保険組合などの医療保険者を介したサービスとしてお目になさったことがある先生方もいらっしゃるかもしれません。おかげさまで、現在日本では800万人あまりの方々にご利用いただけるまでに成長を遂げました。

### ● ピアレビュー調査

ベストドクターズ社では、1991年より医師同士による相互評価・ピアレビュー調査を行っています。日本でも1999年から開始しました。この調査は、医師に「ご自身またはご家族が、ご自身の専門分野である病気に罹患した場合、自分以外の誰の手に治療を委ねるか」という観点から、同一または関連専門分野の他の医師の評価を伺う形で実施されるものです。

現在弊社の日本版医師データベースには、この手法により選び抜かれた各専門分野の「ベストな医師＝Best Doctors in Japan」が約6,100名入力されています。本誌をお受け取りになられた先生はそのお一人です。こうして選ばれた先生方のご照会を介したセカンドオピニオン受診のお手伝い等が、現在日本での事業の中心となっています。

病を患う方々が必要な情報を見つける「近道」をご提案し、治療のための有力な「道しるべ」ともなるロードマップを描く――これが、ベストドクターズ社のピアレビュー調査です。

### ● 日本における総代理店：株式会社法研

ベストドクターズ社の日本進出当初から、株式会社法研（本社：東京都中央区、http://www.sociohealth.co.jp）が日本コールセンターの運営や販売代理を担当するパートナー企業となっております。

### ベストドクターズ記念盾

ご選出記念楯へのお問い合わせを多々たまわり、誠にありがとうございます。予想を超えるご反響をいただき個別のご案内が難しい状況のため、本誌にて概要をご案内させていただく運びとなりました。

お問い合わせ、ご購入につきましては、お手数ですが、下記メールアドレス宛にご連絡ください。折り返しご案内をお送り申し上げます。なお、記念楯は過去のご選出年度（2012-2013、2010-2011、2008-2009、2006-2007）のものも別途お承り可能です。

**【仕様】木目調枠 縦約33cm×横約28cm 重さ約1kg 【価格】2万4,000円※（送料・税込） 【納期】お申し込み後8週間程度**

※氏名欄に記載する肩書き、学位は「Dr.」「M.D.」「M.D., PhD.」等からご選択いただけます。

**e-mail：bd-tate@bestdoctors.jp**（bestdoctorsには末尾に「s」がつきます）

※ 材料費の高騰、平成26年4月1日から実施の消費税増税に伴い、価格改定となりました。

Best Doctors

Best Doctors, Inc.（ベストドクターズ米国本社）
100 Federal Street, 21st Floor, Boston, MA 02110 USA
Tel: +1(617)226-3666

ベストドクターズ社（Best Doctors, Inc）は、1989 年にハーバード大学所属の 2 名の臨床医によって設立されました。今日では、世界 30 カ国、3000 万人以上の方々に、おもに生命保険会社、損害保険会社、企業等を通じてご加入いただいております。

Best Doctors、star-in-cross ロゴ、ベストドクターズ、Best Doctors in Japan は米国およびその他の国における Best Doctors, Inc. の商標です。

本誌は著作権法上の保護を受けています。本誌の一部あるいは全部について、株式会社法研および Best Doctors, Inc. から文書による許諾を得ずに、いかなる方法においても無断で 複写、複製、転載することは禁じられています。

ベストドクターズ社日本総代理店 株式会社 法研
〒104-8104 東京都中央区銀座 1-10-1 Tel.03(3562)8404